

再考・中野正剛「露探」疑惑

——政治における「嘘」とその波紋——

小山 俊 樹

【要約】一九二六年（大正十五）三月、衆議院本会議で中野正剛（憲政会）が陸軍機密費の問題を取り上げ、田中義一（政友会総裁）の金銭疑惑を追及した。その後、今度は政友会の牧野良三が、中野とソ連との関わりを示唆する演説を議会で行った。近代政治史上の「嘘」として知られる中野の「露探」疑惑について、本稿では嘘の生成に至る経緯と、その影響に注目する。政友会の「嘘」は、アーレントのいう政治における「伝統的な嘘」（政敵を攻撃し真実を隠蔽するもの）であるとともに、中野の動向から憶測した予断から発生したものであった。さらに演説の余波は各所に及んだ。本稿では演説を契機として、中野の疑惑を証明するために、ハルピンのソ連領事館等へ協力者を侵入させて公文書盗取を試みた人物による新規発見の記録文書を取り上げ、アーレントが区分した「伝統的な嘘」と「現代的な嘘」（自ら発した嘘を真実と混同するもの）の連続性を考察する。

史料 一〇八巻一号 二〇二五年一月

一 はじめに

二〇一六年、オックスフォード英語辞典は「Word Of The Year」に「Post-truth（ポスト・トゥルース）」の語を選定した。大手メディアが信頼を失い、SNSが急激に普及するなかで、事実誤認や裏付けのない情報を基にしたフェイクニュースが大規模に流れ、人々の感情に働きかけた。これは政治にも直接的に影響し、英国のEU離脱投票や米国の大統領選挙に

おける投票行動をも左右したとされる。

ポスト・トゥルースの時代では、これまで以上にメディアリテラシーを鍛えることが求められる、と言われるようになった。つまり情報の真偽を見抜く力が必要とされるが、「嘘を嘘であると見抜くこと」は、簡単ではない。そこで他方では、何が事実か虚偽かは重要ではなく、虚偽であつても自分に都合の情報なら容易に受け入れる、といった風潮が拡大しているとする指摘もある。見たいもの、信じたいものを信じる人の性向（「確証バイアス」と党派対立は重なり合う。分極化する政治情勢のなかで、インターネットメディアが発達し、それぞれの支持者の好ましい情報ばかりが受容されることで起こる市民の果てしない分断こそが、ポスト・トゥルース政治に潜む根本問題という見方である。

嘘とバイアスが混濁し、共振することで創られる政治空間。私たちはこれを重大な問題として取り上げねばならないのであろう。^①ただし筆者は、真実が置き去りにされる兆候を、現今に特有のものと新味をもつて捉えてはいない。政治的対立の存在するところ、歴史的にも多々起こり得た普遍的な課題の一環ではないか、との思いもあるためだ。それに人が嘘をつくというのは、それが本当に意図的な嘘であるかも含めて、実は簡単には判断し得ないこともあるように思われる。^②

筆者は近年、近代日本の機密費研究の過程において、大正年間に発生した「陸軍機密費事件」をあらためて探究している。評価が確定したかにみえる歴史的事実でさえも、その細部の嘘や誤りを見極めるには困難がつきまとう。しかしその過程で、真贋定かならぬ事例が多い中、筆者は当時から今日に至るまで誰の眼にも明らかな「嘘」とされてきた、珍しい事例が気にかかっていた。機密費問題を議場で追及した中野正剛^③に対して向けられた「露探」疑惑である^④。

一九二六年（大正十五）三月四日、衆議院本会議で中野正剛（憲政会）が陸軍機密費の問題を取り上げ、政友会総裁田中義一の金銭疑惑を追及した。^⑤詳細は後述するが、その一週間後の三月十一日、今度は政友会の牧野良三が、同党から提出された「中野自決の決議案」の趣旨説明のため本会議に立ち、中野による田中総裁追及の演説は軍民を離間する目的でなされ、中野自身にはソ連と深いかわりがあると述べた。

当時の政界における党派対立を基調とした、スキヤンダルの応酬的一幕といえはそれまでである。だが中野の疑惑については、当時から充分な証拠があるものと見なされず、田中を告発した中野への反撃を目的とした嘘・捏造とする見方が強かった。本問題の詳細については、猪俣敬太郎による中野の評伝のほか、松本清張、渡邊行男などの著作が重要で、事件の概略を示すものとなっている^⑥。ただし近年刊行された中野の評伝類では、この疑惑については言及される程度である。本稿ではあえて、この顧みる必要も乏しいと思われるがちな一つの疑惑を、再考したい。中野正剛がじつは「露探」であった、などと主張したのではない。そうではなくて、なぜそのような見え透いた「嘘」とされる問題が、政局の渦中に投げ出されたのか。またそれは当事者にとって本当に明らかな「嘘」であったのか。そして疑惑自体はどのような波紋を呼んだのであろうか。これらを通じて政治と「嘘」の関係、さしあたって「嘘」はどこまで嘘と言い得るのか、それは何をもたらしたのか。同時代的な視点やその影響をめぐる問題について、拙い考察を試みたいのである。

① 政治と嘘の関係性について、アーレント「政治における嘘」（引田

隆也・山田正行訳『真理と政治／政治における嘘』みすず書房、二〇一四年／原著『Lying in Politics: Crises of the Republic, Harcourt Jovanovich, 1972』などが知られる。現代政治現象との対照について、百木漢『嘘と政治―ポスト真実とアーレントの思想』（青土社、二〇二一年）は、真実を隠蔽する「伝統的な嘘」と、自分自身をも騙して嘘と真実の境界を破壊し、全体主義への道を用意する「現代的な嘘」の対比を提示したアーレントの考察を、現在のポスト・トゥルース政治に投影する。近年の近代政治史研究においては、五百旗頭薫『へ嘘の政治史』（中公選書、二〇二〇年）、井上寿一『戦争と嘘』（ワニブックスPLUS新書、二〇二三年）など参照。

② この点について、デリダ「政治における虚言について」（林好雄・森本和夫・本間邦雄訳『言葉ののって』ちくま学芸文庫、二〇〇一

年）、同『嘘の歴史序説』（未來社、二〇一七年）など参照。

③ 中野正剛（一八八六―一九四三）は福岡生まれの政治家。『東京朝日新聞』記者から衆議院議員（無所属）のち革新倶楽部から憲政会―立憲民政党、国民同盟に所属を替え、一九三六年に東方会を組織して全体主義運動を推進。「戦時宰相論」で東條英機首相を批判するなど、東條内閣に対抗して逮捕、釈放直後自殺。

④ 「露探」は日露戦争前後に、日本の国情をロシアに通報した（とされる）者を指す称。間諜、スパイ。奥武則『露探―日露戦争期のメディアと国民意識』（中央公論新社、二〇〇七年／のち改題『ロシアのスパイ―日露戦争期の「露探」』中公文庫、二〇一一年）を参照。さらに日露戦後にも「露探」概念は市井に定着した（藤野裕子「一九〇七年「露探」殺人事件にみる『まつり』のあと』『日本歴史』八七〇号、二〇二〇年一月）。

⑤ 同問題については、松本清張「陸軍機密費問題」（新装版『昭和史発掘1』文春文庫、二〇〇五年／初出『週刊文春』一九六四年七月六日〜八月一〇日号、以下『昭和史発掘』が詳しい。また筒井清忠『戦前日本のポピュリズム』（中公新書、二〇一八年、同『昭和戦前期の政党政治』（ちくま新書、二〇一二年）など参照。

⑥ 猪俣敬太郎『中野正剛の生涯』（黎明書房、一九六四年）。渡邊行男『中野正剛自決の謎』（葦書房、一九九六年）。
⑦ 室澤『評伝中野正剛』（早稲田大学出版部、二〇二一年）。白戸健一郎『中野正剛の民権』（創元社、二〇二四年）二二二―二三三頁。

二 登壇する中野正剛―機密費問題の追及と疑惑の弁明

中野正剛が機密費問題を追及するために、衆議院本会議（第五一帝国議会）に登壇したのは、一九二六年（大正十五）三月四日である^①。この日、中野の動議を受けて審議日程は変更され、壇上に起った中野は、四名の政友会代議士、小川平吉・小泉策太郎・秋田清・鳩山一郎を「査問委員会」にかけよと述べた。「私ノ本来ノ希望ト致シマシテハ、今日政界ニ於テ最モ大ナル疑惑ノ雲ニ蔽ハレテ居ル政友會總裁田中義一君ヲ査問ニ付シタイ」が、「衆議院ハ貴族院議員ヲ直接査問委員會ニ付スルコトガ出来マセヌ」との理由であった。小川・小泉は田中総裁の擁立にあたって蠢動し、秋田は革新倶楽部から、鳩山は政友本党から、それぞれ政友会に合流した経緯がある。

このとき中野は自分の動議について、右の四名を「梅田寛一君ノ査問委員會ニ併託スベシト云フ動議デアリマス」と説明している。梅田寛一は政友本党の議員である。当時の議會構成は、与憲政会（二六三議席）、野党政友会（二二六議席）、政友本党（一一四議席）の三党が衆議院の中心を占めていた。そして梅田は、田中政友会総裁の腹心である山梨半造陸軍大将の手によって、政友本党を脱して政友会に入党するよう勧誘を受け、そこに金品の授受があったとの疑惑をかけられていた。政友本党は梅田を除名し、二月二十七日に査問委員會の設置が可決されていた。

山梨が用いた金品の出処についても、すでに田中義一総裁と三百万円の関係をめぐる噂が囁かれていた。この年一月一

四日、佐藤繁吉なる人物が田中を契約不履行で東京地裁に訴えた。関西の豪商・乾新兵衛から田中に三百万円の融資を行う仲介役を務めた佐藤は、その成功報酬一割が支払われていないと主張したのである。佐藤の訴えは翌日取り下げられたが、この一件が報道されたことにより、巨額の融資を可能にした田中の担保能力について、世上に疑惑が流れるきつかけとなった。

すなわち中野の動議は唐突なものではなく、すでに注目を集めていた田中にまつわる金銭疑惑を取り上げ、より火種を拡大しようとした行動であったと言える。敵党総裁である田中義一を追及するにあたって、中野はある攻撃材料を入手していた。陸軍部内からの告発である。それも演説の前日に入手したものと、中野が壇上で次のように語っている。

實ハ私ハ昨日斯ノ如キ文書ノ寫ヲ手ニ入レタノデアリマス、此文書ノ寫ハ陸軍中將、前ノ憲兵司令官、又第一師團長タリシ石光眞臣氏ガ陸軍ノ風紀ニ關シ、蹶起シテ此革清ヲ期セザルベカラズト決心シ、元帥參議官諸君ニ之ヲ回付スルノ前提トシテ、先ヅ貴族院議員陸軍大將立花小一郎氏ニ手渡シセラレ、立花小一郎氏ト相談ノ上、更ニ之ヲ全陸軍ノ問題トセントスル此書類デアリマス、輕々ナル書類デハアリマセヌ、是ハ間違ナイモノデアルト云フ證據ノ爲ニ、前ノ第一師團長陸軍中將石光眞臣氏ガ、チャント其書類ノ寫ニ自分カラ「サイン」シ、花押ヲシテ居ル（拍手）今私ガ之ヲ讀上ゲマス（此時發言スル者多シ）

中野に情報を提供したのは、石光眞臣中將（元憲兵司令官・第一師團長）であった。石光は陸軍の綱紀問題を憂い、「田中大將三百万圓事件ハ未タ其眞偽ヲ詳ニセスト雖、之ニ依リ軍人ニ對スル世人ノ疑惑ヲ濃厚ナラシメタルコトハ爭フ可ラサル事實ナリ」とする報告書を陸軍部内の要所に提出していた。中野はこの報告書を読み上げた。①現役軍人の政治関与は軍隊の危機、②金銭で政界を攪乱することは軍人精神道德上の重大な犯行、③田中大將の許容し難き犯行が、いまだ何らの制裁を受けていないのは閥族横暴である、といった内容であり、三百万円をめぐる田中と乾の交渉についても触れてい

た。

ところで、中野の演説冒頭部分には、次のような「私の身上」に触れた一節がある。

諸君、只今政友會ノ一角ヨリ起リマシタ御希望ニ應ジテ、先ヅ私ノ身上ヲ明白ニシ、而シテ後ニ私ノ動議ノ趣旨ヲ述ベマス——私ノ身上ニ對スル言明ハ議長ノ注意ニ依リ後ニ延バシマス、而シテ動議ノ趣旨ヲ申上ゲマス。

先の政友会幹部を査問する動議を説明する前に、中野は「私の身上」に関する弁明を始めようとしていた。しかし議長に促され、動議を先に説明したのである。弁明とは何か。実は中野の疑惑——アントノフ（駐日ロスター通信員）から金銭を受領してソ連の「革命ヲ讚美シ、日本モ近キ將來ニ於テ革命アルベキデアルト云フ豫斷セル記事ヲ書イタ」との疑惑——は、すでに前月から議院内で取り上げられ、中野自身も直接反論を行っていた。つまり現在一般には、中野が田中総裁を機密費問題で攻撃したことに対して、政友会側が付け焼刃の反撃を行うために「露探」疑惑を急ぎ捏造したように解されているが、事実の経過は相違して、中野への疑惑が熾りつつあったところに、当の中野が弁明と同時に爆弾動議を実行したのである。

すなわち二月一四日、予算委員分科会の席上で志賀和多利（政友会）は、去る一月二六・二七日付の新聞『日本』上に掲載された中野の疑惑を示す記事（後述）について触れ、記事の著者である久保田榮吉という人物を「御調ニナツタコトガアリマスカ」と問うた。政府側の答弁者である憲政会系の松村義一（内務省警保局長）は「報告ニ接シテ居リマセヌカラ分リマセヌ」（中野の疑惑について）サウ云フ事實ハナイト云フコトヲ、只今ハ斷言シテ置イテ差支ナイ」と否定した。さらに俵孫一（内務政務次官・憲政会）が、中野正剛らに対する宣伝を「果シテ事實ナラト云フ假定ノ問題迄モ高論ヲ及ボスコトニ付テハ御互ニ注意致シタイ」と述べると、志賀も「私モ其通りデアリマス」と応じて、その場の質疑は収束した。

ところが閉会后、志賀が速記の確認に担当部局へ赴いたところ、中野本人が訪れて、たいへんな剣幕で「貴様新聞以外ニ何カ持つて居ルカ」と詰め寄った。志賀は「何モ持つて居ラヌ」と答えたが、中野は「俵次官ガ取消シタト云フコトヲ言ハレタカラ、貴様言ツタコトヲ取消セ」と速記の削除を求めたので、志賀は「君ニ對シテ疑念ガアルト云フ爲ニヤツタノデハナイ」と応じた。「赤化宣傳」に対する当局の「取調べガサッパリシテナイ」という点に質問の重点がある以上、質問そのものを取り消す必要はないとの考えを示したのである。

翌一五日、分科会の場に中野本人が来場し、「一身上ノ釋明ヲ致シタイ」と述べるとともに、志賀の前日の質疑について「中々巧妙ニ話シテアリマシテ、私ヲ攻メタヤウニハ書イテナイ、當局者ガ緩慢ダト云フヤウナコトガ書イテアリマシタ」としたうえで、「人ノ身上ニ關スル重大ナル問題ヲ、此委員會ノ席上デアレ程ノ調子デ御唱ヘニナルニ付テハ、此貴方ノ言論以外ニ私ノ身上ニ對シテ根據アル疑念ヲ貴方ハ持つて居ラレルノカドウカ」と問い質した。これに対して志賀は「新聞ニ中野君ノコトガ出タ以上、之ヲ默殺シタナラバ、臭イモノニ蓋ラスルヤウナモノデアルカラ、赤化宣傳ト云フコトニ付テ政府ハ取調べタカ、調べナケレバ取調べタ方ガ宜カラウト云フコトヲ政府ニ警告シタノデアル、取消ス必要ハナイ」と前日の主旨を繰り返した。

以上のようなやり取りから半月後、中野は田中総裁の疑惑を突如として取り上げた。そのため三月四日の中野演説に対する政友会側の反応は、中野の「露探」疑惑がかえって怪しい、と勘繰るものとなったのである。中野の疑惑をめぐって、すでに分科会で中野と論議を交わしていた志賀和多利は、中野を追ってただちに壇上に立ち、次のように述べた。

諸君、私ハ只今中野君ガ吾々議員同僚ヲ查問會ニ付スベシト云フ動議ガアルト云フコトヲ承リマシタカラ、反對ノ意見ヲ述ベンガ爲ニ出タノデアリマス、然ルニ中野君ノ御説明ト云フモノハ、恐ラク滿場諸君ドナタニモ御分リニナラナカッタと思ヒマス、唯、御分リニナツテ居ル所ハ、中野君ガ露探デアルトカ「スパイ」デアルトカ云フ問題ダケハ諸君ガ御分リニナツタデアラウト思フ。

〔略〕中野君ソレ自身ガ今日天下ノ疑惑ノ中心トナツテ居ルガ如ク、露西亞ヨリ十萬圓ノ金ヲ貰ツテ、露西亞ノ爲ニ赤化宣傳ヲシテ居ルト云フ疑惑ノ中心點ニナツテ居ル〔略〕中野君ノ御演説ガ若シ自分ノ身ノ上ヲ庇フガ爲ニ、斯様ナコトラ論ゼラレルコトデアルナラバ、如何ニモ淺慮千萬ナ御考デアラウト思フ。

それまで中野の疑惑を信じてはいないと公言していた志賀は、一転して中野を「今日天下ノ疑惑ノ中心」として、「露探」疑惑を確信したように語った。志賀だけではなく、総裁の疑惑を述べ立てられた政友会も、中野の疑惑を追及する方針を固めることになる。

他方で、中野は「私ノ論文ヲ露西亞ノ新聞ニ載セルノニ、十萬圓ヲ出シテ買フ馬鹿ガ何所ニアルカ」とロシアからの資金供与を否定し、次のように述べた。

好イ加減ノコトラ言ウテ居ルコトラ捉ヘテ、此記事ヲ屢々議場ノ問題ニスル、〔略〕日本ト云フ新聞ハ政友會ノ領袖小川平吉君ノ新聞デアルサウダ〔略〕此亦新聞ニ書カセテ置イテ、ソレヲ議會ノ問題トスル、最初ハ議場ニ於テ誰モ之ヲ問題ニシナカッタ、段々新聞ニ宣傳ヲナサル模様デアル、天下ノ公平ナル新聞ハ之ヲ書カナイ、アナタ方ニ好意ノアル新聞、オカシナ記者ガ書クノデセウ、一種ノ宣傳デセウ、ソレヲ書カシテ置イテ又議會ノ問題ニスル、而モ連日、今日ハ中野ヲ査問ニ付スル、明日ハ付スル、又付スル、毎日宣傳ヲシテ、而モ僕ノ名前ヲ新聞ニ出サウト思フノガ諸君ノ計畫デアル、私ニ對スル是ガ毒矢デアルコトハ、誰ダツテ明白デアラウラウト思フ（「中野殺シノ陰謀ダ」ト呼フ者アリ）陰謀デス、而モ自分等ハドウモ信ジナイ、條理カラ考ヘテ信ズルコトガ出來ナイ……。

中野は「桀狗堯ニ吠ユ」との古言を引用し、「議場ニ提起シタル人モ證據ハ持タヌ、疑惑モ居ラス、名ヲ出シタノハ如

何ニモ粗忽デアッタ、敬承スルト言ヒナガラ、之ヲ以テ私ノ身上ニ疑問ヲ挟ム行動ヲ爲スニ至ッテハ不可解千萬デアル」として、田中総裁に疑惑が向けられている政友会が「四分五裂セントスル時ニ當ッテ、私ニ毒矢ヲ放ツ」ものだが、「諸君ノ毒刃ニ依ッテ、私ノ身上ハ却テ輝クモノト信ズル次第デアリマス（拍手）」と述べて、自身に対する誹謗攻撃の非を訴えた。

① 中野正剛への「露探」疑惑の発端と見られる陸軍機密費問題（田中義一政友会総裁の金銭流用疑惑）の追及については、帝国議会が主たる舞台となった。以下、前掲松本『昭和史発掘』、前田英昭『国会の「機密費」論争』（高文堂出版、二〇〇三年）などを中心に確認する。

議事録の引用については、「帝国議会議録検索システム」(<http://cricokkai.ri.go.jp/>、#)のテキストを用い、議事速記録により校訂した。

三 報復としての「嘘」？——「露探」疑惑の証明失敗

志賀和多利が予算分科会で提示した『日本』掲載の久保田榮吉による記事は、同人の著書に収録されて現在読むことができる。中野自身が反駁したように、話の内容は久保田がロシアの獄中で、三宅雪嶺と中野正剛が「アントノフから十万圓を貰つて、通信をはげんでゐる」と聞いた程度に過ぎない。^①久保田によれば、一九二三年（大正十二）八月二十四日、帰国した久保田が来日中のアントノフを訪ね、直接該件を問ひ質したところ色をなし、話の出どころを説明すると「マアそんなことはどうでも好いではないか」とかわされたという。^②

前章で述べたように、政友会は中野の「露探」疑惑を確信したために、この記事を発端とした証拠集めに奔走したと思われる。中野演説から一週間ほど後の三月一二日、牧野良三（政友会）が本会議に立ち、「中野正剛君ニ反省處決ヲ促ス」決議案を提出した（政友会の望月圭介と連名）。

決議 議員中野正剛君ハ神聖ナル議場ニ於テ荒唐無稽ノ言辭ヲ弄シ國民ノ疑惑ヲ醸シ且軍隊ノ規律ヲ紊亂シ士氣ヲ廢壞セシメ露國共産主義者ノ響ニ倣ヒテ國民ト軍隊トノ離間ヲ企テタル非行ニ對シ須ラク反省處決スベシ、右決議ス

このときの牧野の演説は、すでに松本清張らによつても紹介されている。^③ 牧野は六日の本会議で、宇垣一成陸相が陸軍機密費疑惑を「虚偽虚構」と否定し、憲政会総裁の若槻礼次郎首相も同調したことを挙げ、中野の非難を始めた。

議員中野正剛君タル者、自己ノ重大ナル發言ガ、自己ノ黨百ヨリ公然虚無ナリトシテ否認セラレナガラ、自ラ處決スルコトヲ知ラズ、唯一時ヲ免レントスルガ如キ態度アルコトハ、何タル卑怯未練ト態度デアリマセウカ（拍手）私ハ我が代議政治ノ下ニ於ケル議員ノ中ニ、斯ノ如キ卑怯ナル一議員ヲ有スルコトヲ深ク浩歎セザルヲ得ナイノデアリマス（拍手）若モ中野正剛君ガ公人トシテノ面目ヲ理解シ、又苟モ人トシテ廉恥心ヲ有シテ居ラレタナラバ（拍手）宜シク此席上ニ立ツテ議員竝ニ國民ニ謝罪ノ實ヲ明ニセラレナケレバナラナイト思フノデアリマス（拍手、議場騒然）

次いで牧野は、中野の田中攻撃は表向きで、真の目的は軍民の離間にあるとする。

憲政會ノ宣傳部長タル地位ニ就カレタ中野正剛君ニ取ツテ、其内容ノ正否ハ問フ所デナク、其出處ノ如何ハ問フ所デナイ〔略〕此點ニ注意スベキハ、由テ以テ反對黨竝ニ其黨首ヲ中傷スルト云フガ如キハ實ハ表面假想ノ目的デアリマシテ、彼レ中野君カ心中竊ニ期シタル大目的ハ即チ我が陛下ノ軍隊ニ國民的疑惑ヲ投ゲ付ケ！（拍手、議場騒然）軍紀ヲ紊亂シ、士氣ヲ頹廢セシメ！（議場騒然）以テ我が國民ト我が軍隊トノ間ノ離間ヲ企テントスルニ在ッタコトハ明カナル事實デアリマス（拍手）

そこから牧野は中野の「陛下ノ軍隊ニ對スル中傷」は「ロシア共産党」と同様の革命手法であると説いたうえで、久保田榮吉の記事を取り上げて、中野が十万円を得たと聞いたことなどを巧みに述べた。さらに『東方時論』に掲載されている中野とアントノフの会見記などを引き、ロシア共産党と関係があるような疑惑を招いたのは、中野自身の四日の本会議での発言によるものと述べた。

中野君ノ去ル四日ノ議場ニ於テ自ラ爲シタル所ノ發言ハ氏ノ身上ニ關シ、以上述べブルガ如キ種種ナル疑惑、種々ナル怪雲ヲ捲起スノ導火線トナツタト云フコトヲ知ラナケレバナライノデアリマス（拍手）隨テ斯ノ如キ怪雲、疑雲ガ捲起ツタト云フコトハ、中野君ガ當然甘受シナケレバナラス結論デアルト私ハ思フ、男女同棲シテ既ニ日アリ、而シテ既ニ子女ヲ儲ケタトキニ、隣人之ヲ呼ンデ夫婦ト云フコトハ怪ムニ足ラヌノデアル、中野君ガ赤露ト交ルコト此ニ日アリ、而シテ遂ニ陛下ノ軍隊ニ對シテ疑惑ノ雲ヲ投ジタ（拍手）此事實ノアル以上、本員等ハ之ヲ咎メテ不謹慎ト爲スハ正ニ當然ノ結果ト謂ハナケレバナラスノデアル（拍手）然リ而シテ若モ本員ノ疑フ所ガ事實デアルナラバ議員中野正剛君ノ罪ハ正ニ死ニ該ルト私ハ思フ（拍手）然レドモ幸ニシテ本員ノ斷ズル所ガ誤リデアルナラバ、中野正剛君ハ自ラ此疑惑ヲ惹起スル如キ言動ヲ敢テシ、更ニ之ヲ誘引スル如キ、輕薄ニシテ賤劣ナル識誣中傷ノ言説ヲ爲シタルニ對シテ、當然自ラ處決シナケレバナラスト思フノデアリマス（拍手）

牧野は疑惑が事實であるならば「死ニ該ル」、そして事實でなくとも「疑惑ヲ惹起」するような言説に対して、中野が「自ラ處決」すべきだと難じた。まことに激越な攻撃であるが、演説中で示された中野とロシア共産党との関係を示す根拠は、久保田の記事を大きく出るものではなく、薄弱なものであった。それでも、牧野によれば演説は上々の出来であった。敗戦後、牧野は次のように回想する。

われながら上出来だと思った。議場がワアワアと沸くんだ。ウマ過ぎるくらいなものだった。派手なおもしろい喧嘩場だった。しかし演説のなかで中野は露探だとは断定しなかった。スパイなどという言葉はそのころなかったろう。あまりおもしろいものだから、翌日の新聞が漫画入りだ。いつも攻撃の中野がやつつけられているのだから愉快だった。宣伝は妙なもので、中野は露探ということになったのだ。タワイもないことさ。^④

しかし実際には「タワイもな」く「中野は露探」と結論づけられたわけではなかった。与党憲政会側からは、ただちに牧野に対する懲罰動議が出され、会議は順延。一三日に再開された議会で、牧野は釈明して懲罰動議は撤回され、中野の疑惑は査問委員会に付託された。

一八日に開催された査問委員会の場は、政友会側の論証がきわめてずさんなことを示した。牧野が本会議演説中で挙げた事情を詳知するという証言者は、いずれも中野の疑惑を否認した。そのことについて牧野が釈明を申し出ると、委員長横山勝之助（憲政会）は「寧ろ釋明ニ非ズシテ事實ノ訂正、若クハ本會議ニ於テ述べラレタルコトノ御取消ト見ルベキモノ」とした。さらに証拠の提示を求められた牧野は「私自身ノ友人ハ材料ヲ持ツテ居ル、友人ト云ヒマシテモ代議士同僚デアリマス」などと答え、ついには「私ハ中野君ガ十萬圓ヲ貰ツテ居ルカラシテ、サウシテ赤化宣傳ニ從事シテ居ルカラシテ處決セヨト云フ、左様ナ不謹慎ナ處決案ヲ提出モ、賛成モ、説明モ致シテ居リマセヌ、ドウモ困ル、左様ナコトニ私ヲ引込ンデヤ困ル」と、金銭の授受については立証し得ないことを露呈した。

二〇日には中野本人が査問委員会に現れ、「牧野君ガ餘リ堂堂タル演説ヲ發展シ過ギルノデ、後カラ材料ガ無イカラ採集ニ行カレタノカモ知レヌ、併シ私ハ貴方トハ申シマセヌガ、斯カル事ニ依テ私ニ自決セヨト云フノハ實ニ恐入ツタル御態度デアル」と述べたのち、牧野の論難に対して逐一反論した。これに対して、牧野は「深く感鳴致シマシタ」と納得し、処決を求める決議案は、中野が「確タル證據ヲ舉ゲズ、又説明ノ資料トナル事實スラ舉ゲズシテ」田中総裁や牧野の「友

人」たる鳩山二郎を攻撃したことに對して、「私自身ガ確信スル」材料を並べてみせたもので、今回証拠を挙げて反証されたことには「喜ビヲ感ジマス」とさへ語った。

このように牧野本人はすでに腰砕けになっており、続く二二日の委員会でも、中野に對する「露探」疑惑と述べた憲政会側に對して、牧野自身が「苟モ中野君ニ……露探ナント言フコトハイケマセヌ」と述べるほどであつた。ところがこの日は、牧野の言う証拠の新聞紙について浜田国松（政友会）が補論し、露語新聞「クラスナヤズナミ」の大正十四年七月二十九日付、第一面第三段に「社説トシテ載ツテ居ル、此内容ハ牧野君ガ慎重ノ態度ヲ執ル爲ニ一應ノ翻譯ハ持つて參リマシタケレドモ、更ニ嚴密ナル再翻譯ニ付シテ居リマス」として、牧野を援護した。

しかしそうなれば、今度は該當する原紙（原本）を出すべきとの議論になる。そこで山本芳治（政友会）が「新聞ノ原本、之ヲ或人ノ手ヲ通ジテ翻譯ニ廻ス際ニ、先般暴漢ニ襲ハレテ原本ヲ取ラレタノデアリマス」と言い出す。だがコピーは残つたので、翻訳はコピーから行い、そのため遅延したと山本は弁解した。さらに問われた牧野は、本会議での演説直前の一七日夜一時頃に「内幸町一丁目ニ於テ三名ノ暴漢ニ」翻訳を依頼していた人が襲われ、数種の露字新聞と翻訳中のコピーが奪われたと述べ、この件の関係者は牧野のほか、砂田重政・山本芳治の三人のみであると答えた。そこで議事はさらに紛糾するが、ひとまず原本の入手を外務省に依頼することでの日は閉会した。

二三日、政友会から記事のコピーからの翻訳と称する内容が査問委員会に提出された。

今回中野氏が極東露領ヲ旅行セルニ當リテ、最モ公平ニ氏ノ立場ヲ論ズレバ、同氏ハ「ハバラフスク」ニ於テ「アントノフ」氏トノ會見ノ際ニ、兩國間ノ思想的或意味ニ於テ「アントノフ」氏ヨリ金十萬圓ヲ中野氏が受取リシ事實ヲ、余ハ極東「ハバラフスク」某大官ヨリ聞知シタルモ、之果シテ事實ナリヤ否ヤノ問題ヲ兩氏ノ間ノ内密ニシテ、世人ハ敢テ之ニ干渉スルノ要ハナイノデアルガ、餘リ茲ニ極東露領ノ内政及經濟問題ニ就テ述べタクハナイ、只此際其十萬圓受授ニ對シテ論及スルニ、此十萬圓ナルモノ

ハ其裏面ニ於テ、中野氏ハ日本ニ於テ露國ノ現思想ヲ輸入且ツ宣傳スルノ意ヲ述ベテ居ル事ハ明ラカデアル、然シ同氏ハ一國ヲ代表スル政治家デアルカラシテ、日本ノ現内政状態ニ對シテハ充分ニ其實情ヲ知レルモノト吾ミハ思フノデアル、然ルニ其金圓ヲ以テ同氏ガ如何ニ共產主義ヲ主張シ、且宣傳セン事ヲ兩氏ノ間ニ密約スルト雖モ、吾人ハ同氏ノ政治的立場ヨリ推論シテ、コハ單ニ同氏ノ口先ダケナラント思フノデアル、恐ラクハ只日本内地ニ於テ同氏ノ政治的費用ヲ得ル爲メノ策デハナカラウカト思ハレルノデアル。

しかしこの翻訳の元となった当該記事の日付について、牧野は「前回七月二十九日ノ新聞ト限定致シマシタノヲ、特ニ其間一箇月ダケノ新聞ヲ調査シテ慎重ニ審議シテ戴キタイ」と、調査範圍の拡張を求めた。これに対して横山委員長からは「モウ少シ廣ク本年一杯ト擴ゲラレタラドウデアリマスカ」と、皮肉めいた提案がなされた。

さらに中野自身が「私ガ浦潮ニ上陸シタノハ九月一日デ、「ハバロフスク」ニ行ッタノハ九月二十日頃デセウ、半月以上モ違ツテ居ル、牧野君ガ初メテ言ッタトキニハ七月二十九日ト云ヒ、次ニハ八月三十一日ノ新聞ダト云フ、此様ナモノヲ以テ私ヲ責メヨウトセル、實ニ三文ノ價值モナイモノト言ハナケレバナラス」と反駁し、牧野が「金ハ其後ニ於テ授受シタト云フノデハナイ、以前ニ授受シタル事實ニ付テ記述ガシテアルノデアリマス」と応酬する一幕があった。

他にも、三月二日付で着任したばかりの二宮健市東京憲兵隊長（中佐）に関する、新聞『日本』の記事（「中野ハ露西亞カラ金ヲ貰ッタト云フコトニ就テ略見當ガ付イテ居ルヤウダ」と語ったとされる）について、畑英太郎軍務局長が「記事其モノガ餘リ、何ト申シマスカ嘘デアリマス」と否定する場面があった。またこの日、露語新聞の原本が容易に入手できないために政友会の所有する「コピー」が提出された。政友会側は入手経路を陳述する場として秘密会を要求したが、秘密会の開催は委員会の議決で否決された。さらに「コピー」について政府委員が翻訳を書記に依頼したところ、「露語ヲ翻譯スルヤウ御依頼ヲ受ケテ、露語ニ堪能ナル人ニ見テ貰ヒマシタガ、文ノ切レ目ガ不明瞭デアリ、誤字脱字モ甚ダ多ク、責任ヲ

以テ意味ヲ捕捉シ兼ネル、隨テ翻譯ノ御依頼ニ應ジ兼ネマス」とのことであつた。かくして二五日、査問委員会は中野への疑惑を「全然虚構誣妄ノ事實」（横山勝之助委員長）として、「議員中野正剛君ハ露國ヨリ金錢ヲ收受シテ赤化宣傳ヲ爲シタリトノ査問事項ハ之ヲ認定スヘキ證據ナシ」と認定した。

こうして政友会側の策戦は無残にも敗れたわけだが、なぜそのような薄弱な証拠で、政友会は一人の反対党代議士に、政治生命を失わせる可能性のあるほどの疑惑をかけたのか。議会における審議の過程を政友会の視点で観れば、次のことが言えるであろう。①二月一四日、中野正剛がアントノフから政治資金を受領したとする伝聞を記した久保田榮吉の記事を基に、政友会が質問を行ったことで中野自身が激しく反発した。②三月四日、中野は田中義一政友会総裁の疑惑を大々的に攻撃した。③このことから、政友会は中野のアントノフとの関係がかえって怪しいと思ひ込み、本会議で牧野良三が代表して中野を報復的に攻撃した。④しかし充分な証拠を集める前に議場へ持ち出したため、査問委員会の横山委員長をはじめ、弁護士出身の代議士による証拠の精査に堪えられなかった。⑤結果、説明が嘘とみなされることに對する反論ができず、信用を失墜させることになったのである。

以上のような経緯をふまえれば、政友会はあまりに安易に中野の疑惑を確信してしまっており、その理由も客観的な証拠からではなく、予断と憶測、状況的判断に重きを置きすぎていた。疑惑が真実との予断をもったため、論証をおろそかにしたまま提起を行い、かえって証明に失敗して世間の嘲笑を買ったのである。もし中野への疑惑提起が、最初から「嘘」で押切る予定の調略であつたならば、政友会はもう少し異なる準備をしたはずではないだろうか。

もちろん牧野が「宣伝は妙なもの」と回顧するように、たとえそれが結果的に「政治的な嘘」になつたとしても、政友会にとっては疑惑の提起さえできれば良いと考えた節もある。中野の痛そうな所を突いてみるだけで、田中総裁への追及に對する報復はある程度果たせるからである。要するに政友会が提起した中野の「露探」疑惑は、半ば明らかな「嘘」である可能性も包摂した「伝統的な嘘」の範疇にあり、政治的デイスインフォメーション（相手の信用を棄損するための偽情

報流布）の拙い形態であったといえる。

ところが中野への疑惑の余波は、これに留まるものではなかった。一九二七年の金融恐慌政変で田中義一が首相となり、政友会政権が成立すると、終わったはずの中野の問題は水面下で再び動き出すことになる。

- ① 久保田榮吉『赤露二年の獄中生活』（金澤書店、一九二六年）一四五頁。
- ② 同一四八頁。
- ③ 前掲松本『昭和史発掘』、六〇—六二頁。
- ④ 長谷川峻「中野正剛秘密黨員説」〔特集文藝春秋・三代日本の謎〕一九五六年）一六五頁。
- ⑤ 中野の疑惑を立証する役回りとなった牧野自身も、弁護士出身の代議士であり、他の同僚代議士が材料集めを担当したために、自党の証拠に途中から信頼を置けなくなっただけと思われる。なお牧野が砂田重政から聞いたところによれば、証拠担当の人物は小川平吉の側近であった春日俊文という（前掲長谷川「中野正剛秘密黨員説」一六五頁）。

四 疑惑の再調査——一九二八年哈爾濱ソ連領事館公文書盗取について

一九二八年（昭和三）四月、東京地方検事局は中野正剛に対する極秘の調査を開始した。この年、第一回の男子普通選挙が行われたことにともない、共産党は公然と活動を始める。これに対して、田中義一内閣は三月一日未明、共産党や労働農民党・日本労働組合評議会・無産青年同盟などの関係者千数百名を、治安維持法違反の容疑で検挙した。いわゆる三・一五事件である。地検による中野の捜査は、この大検挙の直後から始まっている。

東京地方検事局に保管されていた記録類は戦災でほぼ焼失したと考えられ、現在は手にすることができない。ところが、元東京高検部長検事の清泉輝三朗が著した『大正犯罪史正談』の巻末に「中野正剛の謎」という文章があり、清泉が東京地検で発見した中野の捜査に関する記録類が紹介されている。^①それによると、中野を取調べた地検の調査対象は、ソ連から入手された機密文書の写真であるとし、清泉は「第一文書」から「第九文書」までの九点の写真内容を詳述している

(写真画像は著書中にない)。また写真がもたらされた経緯として、ハルピンの総領事館に勤めていたカザン出身のロシア人提供者について記述されている。この提供者は、検事による四回の取調べに応じて内情を語った。その「陳述する所は、確に信用に値すると思われた」という。

小泉元検事は、右の文書を検討して「偽造と認むべき事情は出て来ない」「これだけの偽造文書をつくることの、労と煩とを厭わない特志家を想像することが可能であろうか」としている。また中野を起訴するに至らなかった事情について、「ロシア人」の「生命は頗る危険」であり、もし彼が亡くなった後に立証が維持できるか困難であること、文書には暗号が含まれており、読めるものの協力は期待できないこと、そして彼の証言にのみ重きをおいて、中野の名譽を傷つけたとする非難があれば申し開きができない、などの諸点を推測している。つまりは、文書は偽造でないとしても、直接の論証としては弱いということで、不起訴の経緯はおそらくその通りであろう。

小泉の文章は、各所に影響を与えたらしく、松本清張は「こういうでっち上げは案外のちまで生きていて〔略〕三・一五事件では中野の身辺を当局が極秘裡に捜査した」と小泉書を引用し、「でっち上げというものは怖いこわいようなものである」と触れている。^② また猪俣「中野正剛の生涯」は、小泉書の検討を「秘密黨員―同志八一八号」の項目で詳細に取り上げている。結論として、猪俣書は「〔小泉のいう〕特志家は、ほかならぬ政府―国家権力であった」「〔東京地検の倉庫に埋まっていた調書は、国家権力による陰謀の残骸だった〕」と述べて、中野は政府―国家権力がそれほどの労力を懸けて陥れるに「値」した人物であり、捜査の結果として「不起訴に終わったのは、ついに「黒」とすべきものが出なかったからである」としている。^③

さらに衆議院事務局憲政記念館の企画主任を務めていた渡邊行男が、小泉書には欠けている「報告復命書」(以下「復命書」)がある政友会元幹事長(氏名は不明)の文書中から入手したとして、その紹介を行っている。^④ 「復命書」の本文は「小川平吉関係文書」に収録されている「タワリツシ八一八号件」と題する文書と同様だが、小川文書は表書きを欠いていた

ため、誰に向けて「復命」したものは不明であった。渡邊は表書きを含む完全な「復命書」を入手し、調査が福岡県の知事・警察部長から委嘱されたものであること、および小泉の示した写真が「復命書」の添付文書であり、「本命はこの報告復命書にある」とした。^⑤

ところで、じつは筆者も戦前期から活動する政友会代議士の関係史料中から、小泉が東京地検の倉庫内で発見した「写真」および「復命書」と同じものを含む文書群を、閲覧する機会を得た。「中野正剛ノ件」と題書された福岡県警察部の封筒内に一括された文書には、小泉書に紹介された九点の写真のうち、同じ文書を複製したとみられる写真七点分がある。しかも小川文書と同一の文書および渡邊の紹介した表書きにくわえて、その続編にあたる未公開文書を含む都合三種類の「復命書」、および「中野対露西亜共産党関係事件に関する証拠書類捜査と有力なる資料獲得」と題する綴などが含まれていた。これにより、写真証拠が入手される経緯を新規に知ることができた。そこで以下、右の文書に依って筆者が知り得た点の概略を述べる。

「復命書」の作成者は、いずれも大塚良吉という人物である。『満洲日日新聞』の記者であった大塚は、満洲・朝鮮に長く滞在し、シベリア出兵の時期から現地の情報を軍や内地にもたらしていた。^⑦『田中義一伝記』は伝記編纂にあたって収集した資料のなかにあった「大塚情報」の存在に触れて、中野が「シベリア視察中、約十日間行方不明の日が続いたこと」「ハルピン総領事館員の言として」「革命委員会」から中野に金銭が贈与されていること、などが書かれていることを挙げている。しかし、「何等キメ手となる証拠のないことなので」同伝の編者は記載を中止している。^⑧この田中文書中の「大塚情報」は、一九二五～一九二六年までの「週報」と題した文書で、「復命書」とは別の文書である。

大塚は一九二七年一月と翌二八年二月から四月にかけて、みづから三度ハルピンへ赴いて中野の調査にあたった。一九二七年二月二〇日付「復命書」には、大塚が中野の件を捜査するに至る経緯が記されている。帝国議会で中野への疑惑が問題となったとき（一九二六年三月）、大塚はすでに中野とソ連の関係について「研究探査に没頭」していたため、

「露人密偵」に探查を命じた。すると一九二六年三月の末に、一九二五年秋にハルピンを訪れた中野が、「ダリーバンク（通称極東銀行）哈爾濱支店ニ於テ共產党某機関ヨリ金五千円ヲ受取リタル事実ガ、哈爾濱露国総領事館政治部保管ノ機密文書中ニ於テ発見サレタリ」との情報もたらされたという。

このとき大塚は機密文書を獲得できなかったものの、その後の探查で中野と共産党の関係を「認定シ得ベキ資材の片鱗ヲ捉ヘ」たとして、一九二六年四月八日、左記のところに「秘密諜報」を「密送シ注意ヲ促」した。東京憲兵司令官、東京警備司令部参謀長、政友会総裁田中義一男、貴族院議員赤池濃、参謀本部松井石根、関東庁警務局長、満鉄調査課長。しかし送付先のどこからも反応はなかったため、大塚は「文書上ノ挙証」を得ようと極東銀行の行員を懐柔し、密偵をウラジオストック、ハバロフスクに派遣して捜査を重ねたところ、機密文書や電報その他の物証を確認できたので、第二の「諜報」を発送した。先の送り先に加えて新たに発送した宛先は、政友会顧問吉植庄一郎、朝鮮総督府警務局長、満鉄理事大塚公望男、満鉄嘱託高柳（保太郎）中将、吉植庄三、松居甚一郎、前田恒久、諏訪部一之輔。このときは「二三ノ人々」から「一層ノ奮闘ヲ望ム」などの好意的な反応があったが、国家組織としての動きはやはり皆無であり、大塚としては「衷心遺憾ニ堪ヘ」なかったという。

とくに先の帝国議會で本問題を取り上げた牧野良三からは、次のような返信があった。

議會ニ於ケル中野事件ニ関スル余ノ發言ハ余ノ意思ニアラザル方面ニ逆用サレ非常ニ迷惑ヲ感ジ居レルヲ以テ、折角ノ御厚意ハ謝スルモ御書信ノ趣ハ貴下ノ誤解ニ基クモノト信ズル云々

戦後になって、牧野は「売込み材料が政友会本部にドンドン集まって来たよ。中野は本当に露探だとか、ハルピンの銀行から十万円おろしている受領証の写しを持って来た者もいた」と述べている。^⑨大塚の情報もおそらくは牧野らの眼にも

届いており、その上で取り上げられなかったものと考えられる。

調査結果の反応が薄いことに大塚は深く失望したが、「他日必ラズヤ余ノ努力ト国家ヲ思フ赤心ノ認メラルル時期アルベキヲ信ジ」ることにした。果たして大塚に（福岡県警察部から）調査委嘱の内命がくだると、「忽チ憂奮」して「邦家ノ為メ一身ヲ犠牲ニ供スルトモ必ラズ該事件ノ挙証ニ責ニ任ズベク決心」し、ハルピンに向かった。ソ連公的機関の機密文書を確認することは容易でないと見込まれたが、大塚には従来の経歴上培った人脈などに自信があった。一九二七年二月三日、ハルピンに到着した大塚は「露人密偵」に命を下し、さらにダリーバンク内部にも一名の協力者を得て、十日間ほどで在ハルピン露国総領事政治部およびダリーバンクハルピン支店から数種類の機密文書（甲乙丙丁巳）の写真を撮影することに成功する。ただし、五千円の支払証明書（第八文書）の写真については、同地を訪れていた代議士の赤間嘉之吉（政友会・福岡県）の懇請によつて写真原版を渡し、その直後に赤間が死去したことで失われたという^⑩。

中野の疑惑として囁かれていた金銭の關係について、大塚は五千円の交通費については受け取りがあった（中野の通訳が受け取った）とする一方で、噂された十萬円の供与については、現場とされるのはハバロフスクであり、ハルピンではないので立証は困難としながらも、次のように述べている。

中野ハ再ビハバロフスクニ立寄リタル際、同地ニ於テ金八萬円（或ハ金留カト思フ）ヲ預リタルハ事実ニシテ、世上ニ風評アル如ク十萬円ニアラズ。

大塚による推理の根拠は、クビヤーク極東局長が極東革命委員会會議上にて演説した一節に「過般日本ニ於テ党ノ活動上重要ナル役割ヲ演スベキタワリツシ中野ヨリ其活動ノ実況ヲ聞キ、之ニ応スベキ運動資金ヲアノーヒンニ手交スベク中野ニ委託シタレバ今後日本ニ於ケル活動ハ頻ニ著シキモノアリト信ズル」とあること、一九二六年二月二六日に駐東京武

官がハルピンで報告した際に、八万円で「同盟罷業委員会ヲ組織スルニ至ツタ」と述べたこと、などを記録で確認したところによるという。

さらに一九二八年二月二四日、大塚は再度ハルピンに渡ってダリーバンク関係文書を二種（庚申）入手し、このことを同年三月三日付の新たな報告書（追加報告復命書 控）で、斎藤守圀（福岡県知事）・村地信夫（福岡県警察部長）に復命している。

追加報告復命書

中野正剛対露西亜共産党関係ノ証拠書類捜査事件

首題ノ案件ニ関シ曩ニ捜査ノ結果ヲ報告復命書トシテ提出致置候処、其後継続的ニ捜査ニ努メ獲得シタル機密文書ノ内容（写真原版ニ葉添附）其ノ他ノ事項ヲ追加報告トシテ茲ニ及復命候也

昭和參年參月參日

大塚良吉

さらに別の報告書（第三次報告書ニ付帯セル捜査手続書）では、一九二八年四月二六日、福岡県警の「笠・福田両警部」（笠長兵衛・福田港の二名の警部と思われる）とともにハルピンに赴いた大塚が、写真版のもととなった「原文書」の入手を試みるとともに、五千円の受渡しを目撃したと考えられる人物の捜査を行ったとする。この報告書は表題に「付帯セル」と書かれており、本来あったと思われる「第三次報告書」と一組の文書であると思われるが、「第三次報告書」が欠けているため、分からない部分もある。しかしロシア総領事館から「原文書」を盗出することの困難さ、および「露人密偵」に対して従前の生活放棄を迫り、日本への亡命を勧めることになるため、交渉が難航する様子がやたら詳細に描かれて

いる。

この「露人密偵」が憂慮していたのは、「妻ハ絶対的ニ日本行ヲ拒メル」ことと、もし「生活ノ保障」を得られても、他日「政友会内閣ノ崩壊後ハ必ラス民政党ノ内閣トナル」ことから、中野の身辺を探った密偵に「迫害ヲ蒙ル」恐れがある、そのため五百円の報酬を三千五百円に上げて、日本以外の地に亡命したいとのことであった。大塚はこのとき一枚の原文書（乙号証Ⅱ第九文書）をすでに受け取っていたが、この要求に不愉快を感じ、「露人密偵」をたしなめて、契約の破棄を匂わせた。密偵側の事情をよく理解しながらも、大塚には大幅な報酬増を「裁量スル権限ナク」、かつ一度は密偵本人を「東京ニ連行スルノ事案証拠上最モ必要」と考え、強迫的な態度を取ったのである。

結果として密偵は大塚に従って報酬増を諦め、大塚は五月一日に密偵と協力者から残る原文書（甲丙丁戊己）を受け取り、写真と照合したうえで警部に渡して、翌二日に密偵を東京へ脱出させた。小泉書によれば、東京地方検事局は一九二八年四月から捜査を開始し、まず大塚良吉を取調べ、福岡県警察部に照会を發し、さらに「或るロシア人も調べられた」という。^⑪この取調べが大塚による第三次調査の終了直後であることを考えれば、時系列の辻褄は合う。

大塚のもたらした文書から判明した（と大塚が分析した）ことは、世上にいわれる十萬円の金銭授受は必ずしも中野の私財ではないが、訪露の際に金銭授受があったこと、および中野とロシア共産党との間に深い関係があることは事実、とする結論である。ただし、大塚の残した諸文書や証拠類を、その入手経緯とともに信じるのであればの話である。

なお最後の復命書に、大塚は「捜査上遺憾ノ点」を書き残している。

余ハ最初該事案ノ捜査委嘱ヲ受クルヤ国家ノ重大事件トシテ自己ヲ犠牲トスルモ辞セザル底ノ覚悟ヲ以テ誠心誠意事ニ当リ今日ニ至レリ、然ルニ這般哈爾濱ニ於テ捜査ニ従フヤ余ノ人格ト誠意トヲ疑ハレタルノ感アリシハ実ニ不愉快ニシテ遺憾トスル所ナリ。今捜査上遺憾ノ点ヲ挙グレバ左ノ如シ

(イ) 協同的行動ヲ標榜シナガラ余ノ行動ヲ監視セラレタルコト

(ロ) 密偵交附ノ報酬金ヲ出渋リタル為メ密偵操縦上頗ル不利ナリシコト

二名の警部との「協同的行動」は、大塚にとっては忌むべき不快なものであった。また密偵への報酬を充分に出せなかった悔いも残った。また国家権力（警察・政党）は、「労と煩とを厭わない特志家」としての大塚が「苦心」して入手した文書を活用して、中野を告発するまでの情熱は有さなかった。すなわち、これらの文書は「国家権力による陰謀の残骸」である面をもちながらも、それだけに回収されない、大日本帝国における密偵（スパイ）の執念ともいえる意識―共産主義に対する、また国家に対する―が生み出した感が否めない。

この話は、もう少しだけ続けなければならない。衆議院での中野査問から十七年後の一九四三年一月二一日、中野正剛は現職代議士でありながら警視庁特高部に拘束され、釈放された直後の二七日未明に自宅で自決した。中野の自決理由は長らく謎とされているが、これに関して保阪正康は、ある憲兵隊員の証言を示している。

憲兵隊は、実は中野をコミンテルン直結のスパイと疑っていました。（略）中野は尾崎〔秀実〕と同じ朝日新聞出身だし、大正時代に議会ではソ連承認の演説をしているし、陸軍の政治関与にも反対しています。しかもそのころに陸軍の憲兵隊が調べあげた報告書が残っていて、そこに露探説が書かれていました。それが東條さんに回されたのです。^⑫

一〇月二四日、東條英機首相は中野の拘束延期と議会開会前の起訴を命じるため、内相・法相・検事総長・警視總監・東京憲兵隊長らを集めて命令した。執拗に起訴を求める東條に対して、松阪広政検事総長は罪状も不確かで証拠もなく、すでに拘留の期限も超えている中野の起訴に抵抗し、翌二五日（議会召集日）の午前までに自白が得られなければ中野の

登院を止められないとした。東條首相は薄田美朝警視總監と四方諒二憲兵隊長を残して自白を得るよう要請し、引き受けた四方が午前四時半に憲兵隊へ中野を移送して、二五日午前に中野の自白をとった。直後の検事局での取調べで、中野は「戦いを投げた」印象であったという。松阪総長は中野を予審判事に回し、判事は拘留に衆議院の許諾を必要とする、とした。

かくして中野は一時釈放となるが、さらに警視庁の要望で一晩同庁に泊められた中野の身柄を、翌朝憲兵隊が抑えて連行拘留した。取調べ後の自宅への帰宅には二名の憲兵が付き添ったといい、それは「戦後、憲兵隊幹部が語った話によると、『護衛と思想転換』の名目だったという。…憲兵隊がこのときなお〈中野・コミンテルン説〉を信じていたということ、中野はこうした脅迫に徒勞を感じて自決の道を選んだのではないか」と保阪は述べている。また大塚の復命書を示した渡邊行男もまた、流言飛語では弱い中野の罪状を「昔の容疑を蒸し返して責めるのが最も有効な手段」で、「本人にも身におぼえない『スパイ』嫌疑まで突き付けられては、もはや弁解の気力もなく、万事休すの心境になるのではないか」として、中野の「露探」疑惑を自決の遠因と推定する。^⑬

陸軍内で中野が「軍の団結を破壊する共產主義系思想者」と見なされたのは、機密費問題追及の演説がひとつの契機であることは疑いない。^⑭そしてこの時に生じた中野への「露探」疑惑が公の場では明確に否定されながらも、疑惑を確信した一部の人間が執拗に搜索を進め、収集された証拠類は各方面に拡散されていった。このことが最終的に中野の政治活動を妨げる結果を招く物証をもたらした可能性は認められるのではないか。すなわち本人の否定や客観的物証の有無にかかわらず、一度起ち上がった疑惑は、ある種の政治的バイアスのもとで密かに蠢き続け、それが「嘘」であるかもしれないとの当初認識されていた観念を失わせるとともに、全体主義を推進する国家による嘘の設定に利用される危険性に通じていったのである。

① 小泉輝三朗『大正犯罪史正談』（大学書房、一九五五年）。同書の序文によれば「戦災前東京の検事局には、明治以来の裁判記録が、足の踏みでもない位に倉庫に充滿していた。惜しい事に皆戦火で焼けて、何か特別の理由あつて残つたものは極めて少ない。筆者は東京地方検事局で指導検事をしていた当時裁判記録を渉猟して著名事件の梗概をコッピ―して置いた。今となつては貴重な資料となつたが、本書の資料は之である」（二頁）とある。

② 前掲松本『昭和史発掘』、六四―六五頁。

③ 前掲猪俣書、二四〇頁。

④ 前掲渡邊書、二一〇―二二四頁。

⑤ 同右、二二四頁。なお「復命書」の本文につき、「タワリツシハ一八号件」（小川平吉関係文書）一〇四二、国立国会図書館憲政資料室蔵）および岡義武編『小川平吉関係文書』（みすず書房、一九七三年）六七―一六九八頁参照。なお同文書群には、小泉書が紹介した写真九点のうち八点の複製が現存する。

⑥ 筆者が本文書を閲覧したのは、津雲国利（一八九三―一九七二）の旧蔵文書類からである。津雲は安田銀行員などを経て、一九二八年衆議院議員に政友会から出馬して当選、以来通算八回当選（のち自由民主党所属）。政友会では久原房之助系に属した（奥健太郎『昭和戦前期立憲政友会の研究』慶應義塾大学出版会、二〇〇四年、五九・九一頁）。津雲は政界での情報活動に勝れており、朴烈事件の際には森格の指示を受けたとされる（拙著『評伝森格』ウェッジ、二〇一七年、一四六頁。現在、同文書群は歴史資料館青梅津雲邸のご好意により、奥健太郎・手塚雄太・宮間純一の各先生とともに「津雲国利関係文書（仮）」として整理中。

⑦ 現存する「田中義一関係文書」（山口県文書館蔵）には、「大塚情報」と題する情報綴が相当現存する（文書番号二四―二二六）。「哈

満日情」「哈大塚情」「大塚情報」などと題する文書十点がこれにあたり、中野の疑惑については「哈大塚情二三七号」に「特報」として詳しく述べられている。

⑧ 『田中義一伝記』下巻（田中義一伝記刊行会、一九六〇年）四八五頁。

⑨ 前掲長谷川「中野正剛秘密党员説」一六五頁。

⑩ 「第八文書」すなわち小切手について、小川文書・津雲文書中には写真が現存しない。だが小泉輝三朗は東京地検内部にて小切手の写真を閲覧している。大塚が紛失した写真が閲覧されているのは奇妙だが、詳細は不明である。

⑪ 前掲小泉書、二三〇頁。

⑫ 保阪正康『昭和史七つの謎 part 2』（講談社、二〇〇四年）四九頁。保阪によれば、証言した憲兵隊員は当時横浜憲兵隊に所属しており、「自分の存命中は書かないこと、決して名前をださないことを条件に」語ったという。

⑬ 前掲渡邊書、二三七頁。中野の「露探」疑惑が憲兵隊の判断に影響した可能性を指摘する説は、戦時下の様相を知る人々にとっても容易に想起できたようである。たとえば尾崎士郎が小泉前掲書の記述を引用して、「中野に対する憎念に燃えていた東条が、この調査の写しを手にして、わが事成れり、と心中ひそかに決意をかためたであろうことだけは想像するに難くない」と推論し、「中野正剛の自裁は、憲兵隊で、虚構の告白を強いた時に決したのである」とする緒方竹虎の言葉を肯定する（尾崎士郎『叛骨・中野正剛―主観的な覚え書き』『尾崎士郎短編集』岩波文庫、二〇一六年所収。初出『別冊文藝春秋』一九六三年九月）。尾崎は中野と共産党の関係ではなく、自身が取調べられた経験から「まったく意味のないようなことを強引に、一つの事実としてつくりあげ、憲兵以外の人間はことごとく国賊である」という認識の上に立つて行動する人間」が存在することを強調し、驚

きをもって語っている。

⑭ 陸軍関係団体などから、機密費事件を契機に中野とロシア共産党の関係を攻撃する文書・パンフレット（たとえば奥平俊蔵予備役中将・

河西惟一予備役中将・長堀均予備役少将『陸軍の団結を破壊せんとし機密費問題』一九二六年三月（前掲「田中義一関係文書」一六三）などが出されている。

五 おわりに

政治において嘘はつきものという。なかには政敵を貶める「伝統的な嘘」を巧みに操る者が、政治に長けているとの評価を受けることもあり得よう。しかしたとえ半ば真実でないと周知された「伝統的な嘘」であっても、それが広範に振り撒かれることで、情報の受容者がときに自分に都合の良い嘘を選択し、信じ込んでいく事態を招く。そして拡散した情報のなかで「嘘」と「真実」の境界があいまいとなるとき、これが「嘘」であるかもしれないとの想像力は失われ、嘘に安住し、嘘を疑わずに当然の認識としてさらに声高に叫ぶ安易な道に通じていく。「伝統的な嘘」の当然視は、やがて嘘と真実の境界を破壊して、嘘をつく側も嘘に吞まれていく「現代的な嘘」を形作るかもしれない。その波紋の巨さを、私たちは軽んじてはいないだろうか。

中野正剛を取り巻く「嘘」の発端はささいなものであった。唱えた人間に嘘の意識があったか否かとは別である。久保田榮吉の話は不確かだが、当人は獄中で聞いたことを著したに過ぎないと考えたかもしれない。志賀和多利は久保田の話を通じて、当局の取り締まりを求める質疑をしただけかもしれない。それが当の中野の逆鱗に触れて、中野をして機密費問題追及に駆り立て、田中義一政友会総裁を糾弾する軍閥批判・反対党批判の一大告発を帝国議會の場で展開させた。

しかし政友会は、かえって中野の「露探」疑惑は濃いものと決めつけ、その線での反撃に動いた。牧野良三は、巧妙に断言をさけながらも、中野の「露探」疑惑を議會の場で植え付けようとした。だが充分な証拠を集められなかったため、世人は牧野や政友会の主張を「嘘」と嗤った。そして牧野自身もまた、自分の演説内容を「真実」だとは考えていなかった

た。そこには政治における「伝統的な嘘」の自覚、裏返せば反証可能性を重んじる「真実」への忠誠があった。

だがそれで中野の疑惑が世間から完全に払拭されたわけではなかった。牧野の提起に喚起された大塚良吉は、身命を賭して中野の罪状を明らかにしようとした証拠収集を主導した。大塚の行動は、ついに警察・検察という国家権力を巻き込むまでに至ったが、大塚の念頭にあったものは「嘘」というよりも、中野とソ連共産党との関係を前提にした「危機意識」(「公人トシテ其重キヲ為セル中野正剛ノ共産党トノ連繋ハ帝国ノ将来ニ波及スル所極メテ甚大ナルベキヲ以テ：優力ナルバチルスヲ排除スルノ要アリ」)であった。もはや嘘は「嘘」ではなくなっていたのである。

ハルピンでの執念にも似た蒐集にもかかわらず、大塚が集めた証拠は顧みられなかった。警察・検察が中野を告発しなかった決定的な理由は不明である。だがやはり外国における非合法手段によって得た機密情報の真偽は、公の場での証明は困難であり、情報提供者を守ることもできない等の事情からだろう。確認し得ない疑惑が公然となることのリスクは、当局にも十分に理解されていた。しかし警察が動き、検察も証拠を集めたという形跡は残されたままだった。さらに中野の最期を検討した諸家の見解は、戦時下の東條政権が中野の議会活動を封じる必要を感じた際に、過去の「露探」疑惑が浮上した可能性を指摘している。疑惑が「真実」とされる前に、中野に自らの名譽を重んじることを選ばせたとする右の見解は、政治における「嘘」とその波紋の大きさ―罪の深さを思わせるものである。さらにいえば、中野を「露探」と推定することで法秩序を超えた国家による抑圧が正当化されたのであれば、一連の疑惑をめぐる過程は、政敵を攻撃し真実を隠蔽する「伝統的な嘘」から生じて、嘘と真実の境界を破壊し、国家の歪んだ決定を受容させる「現代的な嘘」へと変容する様相を物語るものと感じられるのである。

【付記】本研究はJSPS科研費24K04727および北九州市松本清張研究奨励事業の助成を受けた成果である。また史料の閲覧をご許可下さいました歴史資料館青梅津雲邸、調査収集のご指導を頂きました奥健太郎・手塚雄太・宮間純一の各先生、および露語の解釈

につき、ご助言を頂きました山添博史・佐々木太郎・伊丹明彦の各先生をはじめ、ご協力を頂きました方々に心より感謝申し上げます。

（帝京大学教授）

Reconsidering the Allegations of Nakano Seigō's "Russian Spy": Political Lies and their Aftereffects

by

KOYAMA Toshiki

In March 1926, Nakano Seigō 中野正剛 of the Kenseikai 憲政会 raised the issue of secret army funds at a plenary session of the House of Representatives and pursued allegations of misuse of funds by Tanaka Giichi 田中義一, President of the Seiyūkai 政友会. Later, Makino Ryōzō 牧野良三, also from the Seiyūkai, gave a speech in the assembly suggesting Nakano's involvement with the Soviet Union. The allegations involving Nakano, which are known as the "Russian spy" (*rotan* 露探) and which began with Makino's speech, are known as one of the most obvious "lies" in Japan's modern political history. This paper will focus on the circumstances that led to the creation of the lie and the impact on this allegation.

The genesis of the "lie" involving Nakano Seigō was trivial. It is difficult to determine whether the person who told the story was aware that it was a lie. The remarks made by Kubota Eikichi 久保田榮一 that started the suspicions were unsubstantiated. However, Kubota may have simply believed that he was recording what he heard in prison in Russia. Shiga Watari 志賀和多利 of the Seiyūkai, who pursued the Nakano matter may have simply used Kubota's story as impetus to question the authorities, leading them to crack down on Nakano. Nakano was so angered that he delivered a speech in the Diet pursuing the issue of secret funds and denouncing Tanaka Giichi.

The Seiyūkai, however, determined that due to Nakano's attack on the leader of their party, the allegations against Nakano were in fact more serious. Seiyūkai representative Makino Ryōzō, while cleverly avoiding

categorical statements, made a speech in the Diet attempting to plant suspicion about Nakano's "Russian spy." However, because he failed to gather sufficient evidence, his claims could not be verified. The public ridiculed the claims made by Makino and the Seiyūkai as "lies." Notably, Makino himself did not consider the content of his speeches to be the "truth." This was due to a self-awareness of the "tradition of political lies," or, alternatively, an allegiance to the idea of "truth" could be disproved. The Seiyūkai's "lie" was not only the result of speculation aroused by Nakano's actions, but also by what Arendt called "the tradition of political lying," which was to attack one's political opponents and conceal the truth.

The impact of the speech, however, reached an unexpected level. Aroused by Makino's claims, newspaper reporter Ōtsuka Ryōkichi 大塚良吉 took the lead in gathering evidence at the risk of his own life in an effort to expose Nakano's guilt. Ōtsuka's actions eventually led to the involvement of the state authorities, the police and prosecutors. What occupied Ōtsuka's mind was not a "lie" but a "sense of crisis" based on the premise of Nakano's relationship with the Soviet Communist Party. For Ōtsuka, the lie was no longer a "lie."

Despite his obsessive collecting of evidence in Harbin, the evidence Ōtsuka had gathered was not recognized as such. The definitive reason why the police and prosecutors did not file charges against Nakano is unclear. However, it is likely that the police and prosecutors were unable to prove in public the authenticity of confidential information obtained through illegal means in a foreign country and the inability to protect the informant. However, there are indications that the police had in fact acted and the prosecutors had gathered evidence.

More than a decade later, Nakano criticized the government during World War II and was driven to commit suicide. Experts who have examined Nakano's final days point to the possibility that when the wartime Tōjō government felt the need to shut down Nakano's parliamentary activities, the earlier "Russian spy" allegations resurfaced. The view that Nakano was forced to choose honor before the allegations were transformed into "truth" reminds us of "lies" in politics and their ripple effects—in this case, the depth of the crime. If the presumptions regarding Nakano's "Russian spy" justified state repression beyond the bounds of law and order, the process surrounding the series of allegations would illustrate the transformation of the "tradition of political lying," in which political opponents are attacked and the truth concealed, tells of the

shift to the acceptance of “modern organised lying” of the state’s distorted decisions that obliterate the boundary between lies and truth.

Keywords; Secret Funds, Speech to the Diet,

ROTAN : the Russian Spy, Lying in Politics, Self-deception